

第十五章

福祉の店「はる工房」

— やっぱり工賃を上げないと —

(平成元年)

52 53 54 ~ 58 59 60 61 62 63 64 ~ 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 ~

- | | | | |
|--------|-------------------------------|------------------|--------------------------|
| •春日園開園 | •たんぼぼ作業所管理開始
•天皇陛下より御下賜金拝受 | •第2春日園開園 | •生活ホーム「とびた」設立 |
| | | •生活ホーム「KASUGA」設立 | •生活ホーム「1・2号館」設立 |
| | | •生活支援サービスのぞみ設立 | •つくし/たけのこ作業所運営 |
| | | | •障害者自立支援法へ移行
•のぞみ移転統合 |

第2春日園は就労継続B型の事業所である。当初4万円を目標にと淡い夢を見ていたが、平均2万5千円程度で移行前の90人でやっていった時と大差はない。どうしてなのだろうと不思議でならない。通所施設でもあり経済的な支援を授産が出来なくては公共のバスや自家用車で来られる方に一方的な負担を強いるのみで魅力のない施設になってしまう。

春日園の作業は企業からの注文がないと納品できず、稼働率が少し劣っている現実はあるにせよ、違った視点から利用者の作業を考えることも必要ではないかと思うのである。

①パンとうどんについて

パンを作り始めてから18年が経過した。今も思うのは当初作っていたバターロールパン、今までどこの店で食べた物よりあれ以上のロールパンに出会ったことがない。

以後職員が変わり作業場が変わり利用者が変わったりもしたが、何とか今日まで来たという思いである。

うどんの製造を始めたきっかけは、商品開発の為のプロジェクトチーム検討会で、次にどんな作業をやる？うどんなら母が作れる。という軽々な発言から作ることになった。大里地区は昔から田圃が少なくその代わりに小麦が作付けされた生産地で夕食にうどんは普通に食べられていた。積極的な賛成は出来なかったが、生産地ということに活路が開けるかも？と始めて既に8年が経過した。埼玉県ふるさと認証食品の認定をもらいましたが中々売り上げの向上は見られず細々とした活動であった。

②コラボの店になればうれしいが

利用者にもっと活躍できる場を提供したい。一生懸命作った商品をその場で食べていただく或は売れて行く喜びを提供したい。その思いからうどんとパンがコラボレーション出来ないものか？和と洋のまったく違う商品が普通に食べられたらいいなと適当な店の妄想にふけったりもしたが、いつも言うように大切なことは商品力。

③福祉の店「はる工房」

オープン

そんな思いが募る中、林野庁の森林整備加速化事業の情報が得られた。要は埼玉県産材を利用した公共施設を作ろうとするもので、早速設計士に相談。ちよつとおしゃれな洋風っぽい明るいお店をコンセプトに、女性を呼び込むことができるお店を目指し、福祉の店「はる工房」の計画を作成し応募した。

一方土地についてはこの周辺は農地ばかりで農地法？が改正されたばかりの今日、建物がほとんど建てられない状況でも



あった。たまたま近隣の中丸氏所有の土地が宅地であったため
お願いして借用することが出来た。

予想以上の工事費の多さに驚いたりしながら平成23年5月10
日やっとオープンにこぎつけた。

夏場は食品の売り上げは下がるといふことは通り相場とこの
と、しかし私達の願いを込めたお店が繁盛するよう願わずには
られない。